

探検・探査

4 号

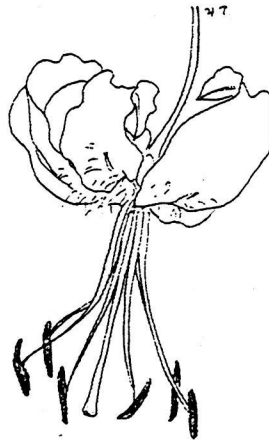
1996 年 4 月

横浜市立大学 探検・探査の会

探検探査の会 会報誌 第4号

目次

若者と探検	会長 大野 正夫	1
生涯発達と「探検探査の会」の役割	幹事長 小森 享二	2
丹沢交流登山	宮崎 捷二	3
キナバル山登頂記	田村 康一	6
編笠山登頂記	河合 武臣	8
触覚・嗅覚への旅	探検部 松林 孝憲	10
「野田知佑とぼく」	探検部 鈴嶋 弘哉	12
無意味な3週間?	探検部 飯岡 有香	14
愉しみましょう!	探検部 池沢 舞美	15
チベット縦断トレッキングツアー	高松 康夫	16
事務局からのお知らせ	幹事 川尻 哲夫	23
会員名簿		25
編集後記		27



カノコユリ

若者と探検

探検・探査の会
会長 大野 正夫



名ばかりの会長を引き受けて、ダラダラとその席について、会誌で挨拶くらいはせねばと思う次第です。どういうわけか探検・探査の会合の時に、海外出張がぶつかります。1月にマレーシア、3月にフィリピン、4月に南アフリカに行く予定です。学生の頃海外に行きたくて、世界地図をよく眺めていましたが、その機会がなく、やっと飛び出したのが、28歳の時でした。探検部の経験を生かして、高知県内で基金を集めて、メコン河水系学術調査ということで、地学の先生と二人でカンボジアに旅立ちました。その頃のお金で、60万円ほど集め、高知新聞に連載の約束までしました。やはり学生と大学教官では、「金の集まりも違うなー」と内心心良く思った記憶があります。先方も国立淡水研究所が全面的に協力してくれて、琵琶湖の4倍もあるトンレサップ湖を船で1週間かけて縦断しました。陸水と生物調査をしましたが、毎晩部落のひとの歓迎を受けて御馳走になり、甲板で星空をながめて床につく。「これぞ探検だー」と思う旅でした。それから20数回海外調査をしてきましたが、いまでも最も楽しく思い出の多いカンボジアの旅でした。すこし年を取り過ぎた初体験でしたが、カンボジアの旅が、その後の私の人生の進路を決めたように思います。

先日国際協力事業団の四国支部長の鈴木宏尚氏と久しぶりに会いました。3年間バングルデッシュのJICA事務所長をして帰国したばかりでしたが、彼は、いつも学生時代探検部でフィリピンの奥地で過ごしたことを楽しそうに話します。彼の現在ある原点もその辺にあるように思えます。酒を飲み交わしても旨いのは、学生時代の友達と飲む時です。私は、息子にも旅を進めています。昨年8万円の切符で米国に、行き先の定かでない旅立ちをしました。ラスベガスや行きつく先から電話があり、彼が帰国してしばらくして、KDDから多額の請求書がきました。これも現代の若者の探検旅行かと思いました。

若者に探検を経験させることは、これから地図のない日本の未来を歩むのに、是非必要でしょう。探検・探査の会の存在価値が高くなることを期待しています。

生涯発達と「探検・探査の会」の役割

幹事長 小森 享二

私は昨年、1995年8月に満46才を迎えた。いよいよ中年の仲間入りだなという感じがした。とりたてて感慨もなかったが、強いて言えば、嵐山光三郎がすすめる分別臭くなく、少し頑固で、ちょっぴり不良な中年になりたいと思った。私が10代、20代の頃に抱いていた中年のイメージと実際に自分がその年齢になってみての実感とはずいぶん大きなギャップがあるような気がする。中年というのは老年に入る手前まで衰退の一途をたどる「もの哀しい」存在に思えたが、現在、周りを見回してみると、そのようなイメージを払拭する姿が数多く認められる。

最近の「生涯発達心理学」の研究成果によれば、中高年という時期にも知的能力は発達し続けるとのことである。確かに皺がふえるとか、白髪が目立つとか外見上の変化、そして体力の衰えといったことはやむを得ないことだが、理解力、推理力、洞察力などは向上し続けると言われている。しかし、現代社会ではただ生産性という尺度だけによって中高年の能力は見積もられ、そして排除されつつあるのが現状である。実際、私が勤務する会社も中年社員の進路選択の幅を広げるという理由で早期退職の制度を設けた。

すべてではないが、大方の社会人は生活の糧を得ることを基本に生活時間の大部分を帰属する組織にささげている。これもある時期が来れば、その組織から解放され、自由を手に入れられるが、代償として経済的保証がなくなる。それに加えて重大なことは仕事に纏わる人間関係が一瞬にして絶たれ、精神的な拠り所を失うことも考えられる。元々、人間関係が心から結ばれた関係でなければ、その維持・継続は困難である。その点、我々の「探検・探査の会」は誰かから強制されて関わっているわけでもなく、大学時代に探検・探査活動に興味をいだいていたということだけを接点に集まった仲間であるから年齢を重ねるに従い、その当事者に影響力を持つと私は思う。なにやら若い人達にとっては縁遠いことのように思うが、それほど遠い先のことではない。きっと私が今、述べていることを身近に感じられる時が来ると思う。それまで私は「探々会」を会員の人達と一緒にあって育んでいきたいと思っている。

丹 沢 交 流 登 山

1965年卒 宮 崎 捷 二

探検探査の会からの手紙が届いた。市大探検部のネパール・チュルー登頂の活躍に、“現役に負けじ”と、より壮大な遠征計画をたてるべく……丹沢交流登山とある。該当日に他の予定が入っていない、すぐ参加を決める。小生にとって丹沢は31～2年ぶりだ。案内にある予定の日程は次のとおりだった。

9月23日(土) 11:30 小田急・新松田駅集合

	富士急バス	徒歩	
新松田	=====	玄倉	—— ユーシンロッジ
11:55		12:39	16:00

9月24日(日)

ユーシンロッジ	——	向角の頭	——	桧洞丸(青ヶ岳山荘で昼)	——	西丹沢自然教室
9:00		11:20		12:30		15:30
——	西丹沢	=====	新松田			
	15:40		16:49			

1995年9月23日(土) 秋分の日

14:17 ユーシンロッジに着いた河合、川尻、小森、高松、水尾、宮崎の6人は、部屋で少々くつろぎつつ、ここ迄の無事の到着に途中で仕入れて来た缶ビールで乾杯。探検部の現役や他のOBは、沢登りをしてから来るという。まだ時間がある、大石山へ登ろうと話している時に鈴木が到着。彼の話では塔ガ岳から富士山や南アルプスがよく見えたという。

15:03 鈴木を除く6人で大石山に向け出発。ロッジのすぐ裏手の橋を渡り、じきにスギ林の急登になるが何故だかかなりのペースだ。15:11 四阿に着くが皆ヒーヒーハーハーだ。3分間ほど休んで動き出す。しばらく行くと尾根づたいになる。15:41 “大石”という大石がある所を通過。「どこ迄行くの」「大石山です」「その向こうは暗いと危険だよ」と、このまま行けば日没と心配してくれた下山客との会話。先に行く高松・水尾のペースは一定だが汗滴り落ちる。鉄はしご・鎖手すりが現れ、前方に小ピークが見え始めると10分程で大石山頂だった(15:56)。標高1219.7m、蛭ガ岳・塔ガ岳が見える。汗びっしょりだ。逆光の中、雲と同じ色の富士山が浮かび、その真上に陽も浮かぶ。15分ほどして諦めずに河合・川尻も着く。小森は四

阿から下ったという。桧洞丸からの男性にシャッターを頼む。水尾がミカンと玄米茶を、川尻がカロリーメイトを振る舞ってくれた。16:32 登って来たルートで下山開始、17:00 ロッジ着。

ロッジの玄関に学生3人（佐藤、星川、松林）おり。風呂は未沸、先に夕食だと食堂に集結、ビールで乾杯、カツライス。食べ終る間際に田村と学生3人（飯岡、池沢、鈴島）が到着。再び乾杯、18:00だった。その後部屋に移って懇親会、自己紹介をしつつ歓談する。結婚相手（相木）が決まったという田村に、OBからのお祝い品としてガソリンコンロを贈る。昼間の汗を流しに風呂に浸かる、良い気分なり。OB部屋に移り河合・宮崎はすぐ横になるが、他の連中は地図を開いて明日のルートの検討をしていた。

1995年9月24日（日）

台風14号の影響だろう、夜中に始まった雨の音が朝もそのまま強く、6:20ころ桧洞丸への登山中止決定。1階のロビーにて全員で記念撮影し、ここで現役生と別れたOB8人は、7:55 小生のワゴン車で下り開始。なに！歩きでないのか！

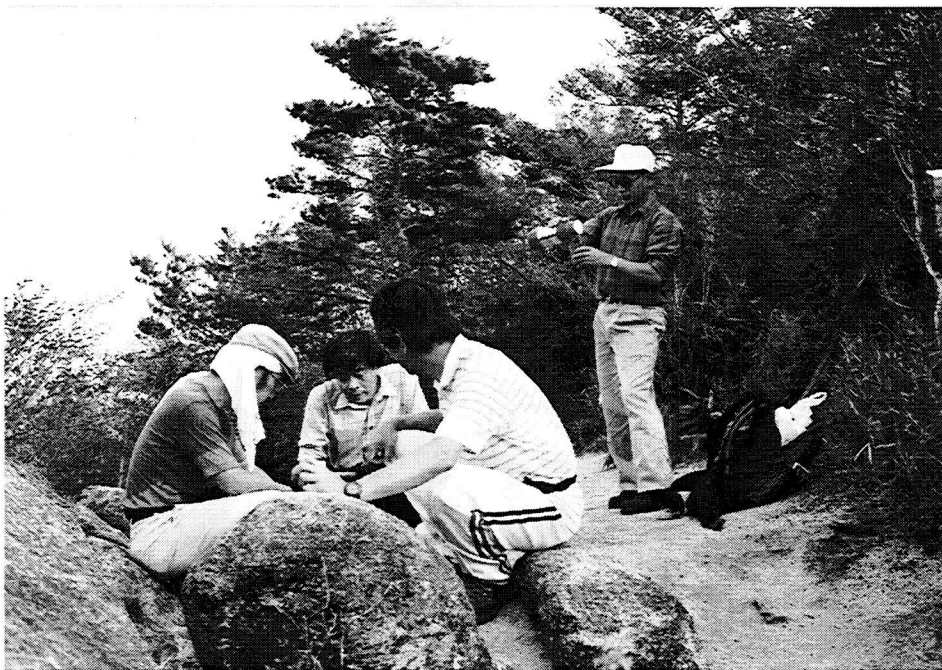
そうなのだ、小生が前日、玄倉で駐車料を支払い終え歩く準備のため荷造りをしていると、1時間近く遅れのバスが到着。川尻が寄って来て「車を見てしまったので」とそそのかす。お爺さんみたいのばかり故仕方なしか。売店のおばさんに「ごめんね」と払い戻してもらう。13:35 玄倉発、途中の店で缶ビールを仕入れて、車窓から釣りやテントを張っての憩いの人々の姿を見ながらユースンロッジに着いたのだった。

登山中止でまだ時間がいっぱいある、考えた末に水尾の推薦で“洒水の滝”に寄る。“しゃすい”と読む、雨はすでに上がっていた。日本の滝百選の地とあり30mばかりの高さの岩盤を流れ落ちる見事な滝だ。「おん あろりきゃ そわか」と唱え願いを託すのだ。手持ちのポリタンに洒水の水を汲み、茶店に立ち寄りビール・味噌おでんを食べ、河合がそこで買った茶をそこで飲む。

10:32 新松田駅で解散。桧洞丸に登れなかったが、時間に追われないこんな旅もまた良いものだ。



丹沢交流登山



大石山頂



ユーシンロッジ

編笠山登頂記

河合武臣（1961年入学）

小学生の登山の下見をかねて、八ヶ岳の主峰赤岳の南にそびえる編笠山に登頂した。かなりきついコースだったので小学生には、無理のように思えたが、そのようすを記してみる。

午前5時過ぎ起床。朝の準備をして、6時10分乗用車で妻と八ヶ岳に向かう。横浜横須賀道路から、国道16号のバイパスを抜け、橋本から津久井湖、相模湖を通り中央高速に入る。高速は、よく流れ、途中2度休憩をとり、小淵沢インターで降り、八ヶ岳公園道路を経由して、観音平に10時過ぎに着く。標高約1500m、無料駐車場に車を止め、登山の準備をする。

10時20分登山開始。グリーンロッジの脇にある遊歩道を通り、登山道に入る。遊歩道の終点は展望台で、ここから登山道に入る。ここから急勾配あり、なだらかな登りありの樹林帯を歩く。妻は初めての登山で、体も慣れていないので大分きつそうである。私も風邪で鼻づまり気味、ハーハー大きく息をしながら苦しみながら登る。小刻みに休憩をとりながら、登る。12時15分押手川に着く。川は流れていない。看板の説明によると、岩に生えた苔を手で押すと水が流れのどを潤したことからこの名が付けられたとのことである。標高2200mと書いてある。

押手川を過ぎた頃から登りは急勾配の連続になる。樹林帯で、大きな岩、木の根、倒木を両手も使いながら、45度も近い登りを休み休み登る。体も大分慣れてきたが、急勾配で体力を消耗するので、一気にとはいかない。悪戦苦闘しながら、休みの時飲む水筒の冷水を楽しみに、また、その時の心地よい風当たりを楽しみにしつつ登りを続ける。途中、登山道から少し離れたところに、巨大な溶岩の大岩が一面にころがって、ずっと続いているところを発見する。こんな所もあるのかと、自然の景観にみとれ、しばらく時間を過ごす。その後も急勾配を登り続け、やっと、14時30分編笠山頂上に到着する。

頂上は、大きな岩ならぬ中ぐらいの石の積み重なりでとても広い場所である。ごろごろ石のため鬼ごっこをして遊べないが、たくさんの人が休める場所である。風通し、見晴らしはとてもよい。赤岳方面からやってきたワングループは、到着後ここからの景色を見るや、口々に大きな歓声を上げていた。南側の眼下には、八ヶ岳の広い高原と南アルプスが一望に見渡せる。北側に目を向けると、すぐ近くに八ヶ岳の主峰赤岳をはじめ、権現岳、三っ頭、西岳などが見え、そして遠くに中央、北アルプスが見える。編笠山の頂上の標識には、2520mと書いてある。

疲れを癒し記念撮影などして、登りの反対側に降りる。青年小屋経由で帰ろうという、にわか計画で行動する。頂上から急な狭い岩場の道を降りる。10分も降りると青年小屋が真下に見える。大きい古ぼけた小屋だ。しかし、小屋までは、何と巨大な溶岩でできた大岩がずっと小屋まで続いているではないか。小屋の後ろが樹林帯である。この、巨岩の上を越さなければ青年小屋まで行けないことがわかる。少しずつ、ゆっくり、岩から岩を何度も何度も越ながらやっと小屋の近くに到着する。

水筒の水は少しだけになったので、帰りの水を補給する必要があった。西岳方面に徒歩5分のところに、乙女の水という水場がある。案内もでているので、水筒をもってでかけ

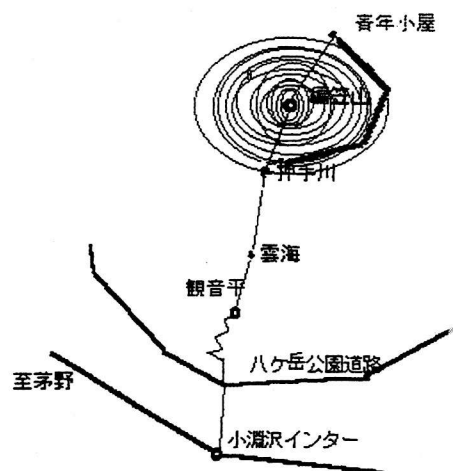
る。水量は少ないが、樋をつたわってくる水は、氷水と同じで冷たい。暑さでまいてい
るからだには、命の水である。冷たい、おいしい、疲れが吹き飛ぶ気がした。2つの水筒
を満水にして小屋まで戻る。

15時45分頃青年小屋を後にして、編笠山の巻き道を通り、押手川に降りる。ここま
で約45分。途中ヤマハハコの白い花、赤紫のホタルブクロ、紫のオオヤマリンドウ、青
色のツリガネニンジンなど可憐な高山植物にであう。下りながら、足に加わる重力に長時
間耐えに耐えて、よくもまあ、こんなに登ってきたものだ、自分で驚きながら、観音平
の駐車場に着いたのは、午後5時45分頃であった。足はかなり疲れたが、目的を達成
したのと、疲れが逆に快い気持ちであった。着替えと、帰る準備を終え、午後6時過ぎに
車を横浜に向かって走らせる。

この後、中央高速を走っていたが、渋滞のため甲府南インターチェンジで降り、国道2
0号線をすいすい走る。途中、大月の対向車線で、祭りの行列の阿波踊りを徐行運転で通
過する。それぞれの組みがおそろいのいでたちで、子どもも若者も大人も、楽しそうに行
列を組みながらおどっていた。見学する人々も多くでて盛り上がっていた。阿波踊りなら
ぬ大月踊りの行列の終わりから、その後ろには待たされた車の行列が長く長く続いていた。

大月を抜けると、またすいすい走り、相模湖まできて、20号線と別れ津久井湖、橋本
と朝きた道を通る。途中2度、夕食と休憩をとり、午後11時頃家についた。

概念図



触覚・嗅覚への旅

探検部 4 年 松林 孝憲

強い日差しで岩が蒸され鼻につく臭いを発している、そう丁度盛夏の頃の出来事だったと思う。岩は南向きで日中は絶えず太陽の下にさらされるはめになり、露出する肌にも汗の臭いと太陽の香りが混じりあっていた。

場所は定かではない、と言ってもどこでもいい。トルケスタン山脈の花崗岩峰群の一つ、草付きだらけの岩だったとしておく。かなり無理がある。パートナーはよく覚えている。いつものパートナーには今回、御登場願わない。今回は特別渋いところで、今は亡きピエール・ベジャンと、ついでにと言っては何だが最近史上 3 人目の 8000 m 14 座登頂者となったエアハルト・ロレタンとしておく。彼らも面白い迷惑である。なぜその岩場を目指したのか、と問われても困る。今の私には答える術がない。ただ岩の臭いとハイマツの香りが私を引き寄せたのかも・・・。

私たちは、フレンズやナッツをクラックにかませ、順調にピッチをあげていた。終了点まであとわずかのところまできている。私がリードしている時ザイルにちょこっと体重を掛ける。と、ファイト一発よろしく突然単なるミスか、神のいたずらか、ザイルがブツリと切れる。ここまでは百歩譲っていいとしよう。問題は、ここからだ。当然といえば当然だが私は、落っこちている。これにはさすがの私のパートナーもどうしようもない。私は、どんどん加速度を増し、ニュートンを恨んでもしょうがない状態である。落ちる、落ちる、既に目の前真白だ。

どれぐらいの時が過ぎたのか、まだ私は空中を重力の法則に従って漂っているらしい。空白状態の脳裏から何かが朝靄の様に生まれてくる。加速度を増すほどその勢いをます。懐かしい、それが空白状態の頭の中から生まれた私の理性による第一声。頭の中で生まれたものは、そのように私を思い起こさせたが、そのきっかけは、感覚、取り分け嗅覚による臭いであつたのかも・・・。

んっ！、かび臭い。これはなんだ。テントの臭いだ。ずぼらであまり手入れをしていないからだろう。ひどい時は、前回の合宿の食物が染みとなって残っているときもある。ついでに足の臭いもしてきた。これはたまらん。今度は煙臭い。髪の毛までも煙の臭いが染み込んでいる。薪に火が付かなくて難儀している。マッチ一本ですぐ焚火がで

きることは、探検部内ではある種のステータスだ。でもまだまだケツが青い。次は少し今までとは違う煙の臭いがしてきた。妙に松脂臭い。脳裏に生まれる景色は、ネパールの山奥。目の前にはアンナプルナ山群、山頂は雪煙を吐き、山全体が光輝いてる。今思えば2週間にわたる異様に長い往路のトレッキングもやっと終わりに近づき、目標の山が見えてきそうなところにいる。そのようなところで私と他の隊員達がむさぼるようにダルバート（私たちの主たる栄養源であった現地食・汁ご飯、お替わり自由。と、言っても量に限りがあるので、いち早く食べた者が勝ち。彼の地では早飯早糞が原則なのだ）を食べている。「エク チャー ディノス（お茶下さい）。」と覚えたてのネパール語を小粋に使って、薄暗いバツティー（茶屋みたいなもの）に入る。中では私たちのガイド（名・パサン シェルパ）が、店の美人ネーチャンをからかっている。けっこう女つたらしだ……。そう、このバツティーの臭いだった、マツ脂臭い煙とは。薪にハイマツを使ってるため部屋中がその臭いで充満していたからだ。

ハイマツの香りは、私の脳裏に焼き付いている。森林限界を超えるとまず最初に香るのがそれであり、岩登りでハイマツを手がかりに使うと、その香りが後まで手に残る。街中でもこれに似た香りが漂っていると、つい立ち止まってしまう。まあ、生来マツが、好きなのだろう。なにせ、名前が松林だから。

くだらないことを考えているうちに、私の落下も終わりに近づいてきた。衝撃と共に春の眠りから目を覚ます。ベットから落ちた。目の前はいつもと何ら変わりのない景色がただあるだけ。

私の探検部活動は、まさに嗅覚と触覚の旅であった。近代以降人間は、視覚に偏重して外部判断をしてきた。しかし視覚によって得れる情報は限られている。遠くで見たものは、近くで触れてみないとその真の大きさは分からない。目で見えない影のところからもなにかが臭ってくる。このように嗅覚と触覚を刺激する旅もまた一興だと思う。

経済3年

鈴島 弘哉

「野田知佑とぼく」

ある日、図書館で一冊の本を手にした。それは「カヌー〜」とかいう本で、探検部で川下りなどをやってみたいなあと思っていた僕は、「ちょっとみようかあ」と言う感じで、開いてみた。その瞬間「げっ」。なんと、その本は僕が想像していた写真がいっぱい載っていて、あまり字が書いていないような本だと思ったのだが、それは字がズラリと並んだいかにも「本」というものであった。本を棚に戻そうかなあ思ったが、その頃ちょうど「本を読む」という行為自体に興味を持ち始めていたの僕は、「まあ、いっかあ」という具合に借りてみた。数日後の感想は、「この本エエワ〜」である。まず、本の文章自体が本を読む事に不慣れな僕には比較的読みやすかったし、また何かク〜ルな感じがして、またその文章を書いた著者である野田知祐にホレてしまったのである。そして、純粹にもっとトモスケワールドを知りたいと思い、数日後、本屋さんで普段あまり立ち寄らない文庫本コーナーに行って、野田知祐の文庫本を、計4冊を買った。普段、自分にとって本を4冊も読むということはかなりの重労働的な感じを持っていた僕はなんと数日で読み終えたのである。そして、「野田知祐ツてカッコエエわあ〜」「俺、知祐になろうかなあ〜」と。

そして、部室にあったファルトボートの事を思い出し、あれを使って実際にやってみようかなあとおもうようになっていった。つまり、野田知佑ゴッコをしよう思うようになったのである。具体的に言えば、川の上で本を読み、日記を付け、詩を作り〔これはウソ〕、曲を作り〔これもウソ〕、「人生とは何や」など物思いに耽ってみたり、また、EPIを使ってチキンラーメンをカヌーの上で作るそして食べ、またKANOE犬などもいれば最高かな。もちろん、名前はガク。そして、魚を釣り、バジリコ・ナツメグとかいうワケのわからないような香辛料をつかって調理し、そして食べる。余った魚は薫製にして後で食べる。最終的には野田知祐のように1冊の本と合わないものの、自分だけの日記のような物を作ればなあと思う。ちょっと固い話だけど、川下りを通じて人間と自然の関係ということ

にも考えてみたいと思っている。

以上書いた事は理想だけでも、その中から1つでも2つでもいいから体験できればとおもっている。今後は、そういう理想を持ちつつ、カヌーに挑戦しようと思う。



‘96 5月 新歓青木が原樹海



無意味な3週間？

経済3年 飯岡有香

私は本当に何にでも流される人間で、強い意志なんて、面倒なことから逃げる時ぐらいにしか持ったことがない。探検部の活動もそんな感じで、誘われて行く、とか面白そうだから首をつっこむ、というのがほとんどだ。先輩達の口から良く出る探検論などにもさらさら興味がなくて、いつもそれほど深い考えもない。そんな風に活動に参加してきた。活動と言っても、実はそんなにはしていない。けれども、どれも初めての経験ばかりで、何もかもが新鮮だった。特に、無人島での生活は忘れがたい。行く前からワクワクしていて、ホントに楽しみだった。島についてからも、数日間の子供のようにはしゃいでいた。そのうちバテてしまったけれど、日常から離れて何をするでもなく無意味に思える時間を浪費し続ける自分も、なんとなく好きだった。私を煩わせていたもの、邪魔なものが何もなくて、ラクラクとか思ってた。自分の部屋もなくて、ずっと他人と一緒にするのは狂いそうになったけど。最後の頃は、帰る日を指折り数えるようになったものの、はじめてのことだらけで、けっこう内心楽しんでいた。海で溺れかけた時なんか、岸に上がって落ち着いてから、なんだか知らないけど大声で笑い出たくて仕方なかった。やっぱりなんかこう、ギリギリのところをじりじりと進むああいう感じはたまらない。海に流され、懸命に波に飲まれながら浮いている時間はすごく長くて、力もなくなってきて、まじめに私は死ぬと思った。すぐにあきらめがついた。岸は遠くて、泳いでも進まなくて、波もかなり高く、しこたま水を飲んだ。あーあ、って思った。でも岸に着いたとき、かなり興奮していた。腹の底から笑いたかった。無事に家に帰ってきて、ひどい日焼けに文句を言いながら、秋になり冬になると、あんなに帰りたくて帰りたくて仕方なかったのに、あの島が恋しく思えた。昼寝した岩場とか、夜の波音とか、月明かりとか、流星とか、島の景色が頭の中にちらつくのだ。冬の最中に。戻りたいと思った。強烈に。そういう圧倒的なパワーがあった。いい経験だった。他人から見たら無意味な3週間でも、私はきっと何かある度にあの島のことを思い出す。深い考えがあってもなくても、大事なのはきっとそういうことなんじゃないかと思える。

愉しみましょう！

経営3年

池沢舞美

私は探検部に入ってまだ1年だ。去年の活動で一番印象深かったのは、無人島。約3週間沖縄の無人島で暮らした。もちろん初めての経験だ。行く前には、木の上に家を作ろうとか、いかだで海に出ようとか、いろんなことを頭に描いていた。けれども行ってみると、とても暑くてだるくて、それどころではなかった。初めの2、3日ハシャいで遊びすぎて、ひどい日焼けに悩まされた。日焼け止めなんか何の役にも立たず、初日ですでに諦めた。思えば長い時間ゴロゴロして過ごした。でも、つりもしたし、おフロもないのでバケツの水で海辺で体をふいたり、山羊を見つけて喜んだり、体中に落書きやペイントをしたり、どうでもいいことで楽しめた。だって外で裸で体をふくなんて、日常ではそうそうないでしょう？無人島効果はすごいもので、砂浜でトイレを済ますことも、そこらへんにゴロ寝することも、フケツそうな水を飲むことにも慣れた。おフロに何日も入らなくてもわりと耐えられた。しょっ中頭をかきむしっていたけど。今となったらとてもいい思い出。すごく楽しかった。今なら何とでも言える。もう1度あんな夏を過ごしたいと思う。心から。何もすることがなくて、ずっとボーッとして、眠りたい時に眠って、何をしていたかも今では漠然としか思い出せないし、ホントにそれくらい何も残ってないのかもしれないけど、黒焦げになった自分が何気に誇らしかったし、家に戻ってもトイレに行きたくなるとトイレトーパー持って外に行かなきゃって思ってしまう自分がなんだか可愛らしかった。探検部にいることも、活動の意味も、深く考えたことなんてないし、これからだってそんなこと考えることなんてないと思うけど、そんなことどうでもいいと思える。海に流されそうになってドキドキして、キレイな夕日を見てジーンとして、あんなに楽しくて、その感覚の断片だけで、探検の意味なんて埋め合わせになってしまうと思う。明確な言葉になどしなくても。私はそういう風にしか考えられない。



チベット縦断トレッキングツアー

—その2—

高松 康夫

前号('95年3号)では、チベット・トレッキングツアー実現の過程とチベットの現状、そして私がチベットに関心を抱いてから2度目のチベット旅行となった経過を中心に記した。今回はいささか古くはなったが、チベット・ラサからネパール・カトマンズへ抜ける旅での見聞を中心に記してみたい。

クンガ空港からヤルツェンボ河沿いに東へツェタンへ向かい、そして西へ戻り、ヤルツェンボ河を渡って首都ラサへ向かった経過は、前号での河合氏の紀行文に詳しい。私にとってサムエ寺やツェタンの王家の墓、ヨンプ・ラカン、昌珠寺は最初のチベット旅行(87年)では行けなかった所だけに期待は大きかった。

サムエ寺は全体が立体マンダラになっており、中央の大本堂は真新しく周囲の堂もほとんど新しい。これは文化大革命時に破壊されたものが、最近になって改修もしくは再建されたためである。したがって、大本堂内の仏像、タンカ、マンダラもほとんど原色の鮮やかさで、写真映えはするがチベット仏教としての歴史の重みを感じられない。このことは他の歴史的寺院でも共通である。

ツェタンの王家の墓は吐蕃時代の歴代の王の墓とされているが、やはり破壊されたゴンパ(寺院)が無残である。しかし、川を挟んだ谷間にはチンコー麦畑が広がり、緑、黄と彩りのコントラストが目を引き。周囲の山々は岩むきだしの裸山か、かろうじて矮性の草が生えている程度である。そして、集落が数十戸もしくはそれ以上で散在している。これらの景観はチベットの他の町・地域でも共通に見られる。ヨンプ・ラカンでは小高い丘に建物があり、そこからの景観は素晴らしい。チベットの農村の生活圏を代表していると思われる。ツェタンは市街、郊外とも麦畑が広がり、小さい町ながら豊かな風光明媚な町といえよう。

さて、いよいよラサである。7年振りのラサ見参である。ヤルツェンボ橋を渡ってキチュ河沿いにしばらく行くと、左側の池に屹立する岸壁があり、そこに彩色された磨崖仏が刻まれている。以前通った時はバス利用だったので車窓から見ただけであったが、今回は車を止めてゆっくり眺めることができた。デブン寺近辺に来ると遠くにポタラ宮が見えてくる。市内に入ってポタラ宮が大きく見えてくると間もなくホテル着、と思いきや、何と予定変更で、市内を突っ切って東外れの二流の日光賓館になってしまった。当初予定の西はずれに近い拉薩飯店は、外国人専用的高级ホテルで料金は高いが冷たいビールが飲めるのが楽しみだったのに残念である。

8月4日から8日の朝まで4泊5日間ラサ滞在となった。ラサは7年前に比べると大きく変化したことと変化していないことがある。まず大きな変化は高級ホテルがあちこちに建築中であること、漢人がさらに増えて市内は人口の半分以上居住しているのでは

ないかと思われる。また小ざれいな店が増えていること、これは漢人の経営である。要するに漢人がどんどん進出してきて、軍事施設、官公所は勿論、ホテル、旅行社、新しい商店等を支配下に収めているといえよう。そうそう、良い意味での変化したものの一つは、市内に緑が増えたと感じることができたことである。ポタラ宮の屋上から見ると、建物が増えたと同時に緑も増えたと感じられた。変化していないことは、市の中心街(大昭寺・八角街)は相変わらず人で賑わっていること。大多数はチベット人で巡礼者も多い。そして古いチベット式建築の商店や露店はチベット人中心であること。八角街近くの食肉市場は以前と変わらない。また、昔宿泊したゲスト・ハウスのキレー・ホテル(吉日旅館)やヤク・ホテル、バナクショウ・ホテルなども相変わらずである。

ポタラ宮の見学は以前と異なって裏口と思われる紅宮からで、車でかなり上部まで入って行ける。逆まわりで白宮入口へ出て来る。現在改修中のため見学出来ない部屋もあるが、各部屋ごとに撮影料を請求されるのがたまらない。50元~100元とまちまちだが、高いので結局撮影はしなかった。ラサ市内を廻るには、前回はバス、貸自転車、耕耘機の乗合車、徒歩であったが、今回は運転手付きの車、バス、三輪力車、徒歩である。近距離は三輪力車が安くて便利である。

ラサ滞在4日目(8月7日)、ラサから60km離れたガンデン寺へ半日コースで行く。ただし、河合氏は高山病が好転せずホテルで静養することになった。車と寺院の階段の昇り降りが回復を遅らせているようなので、近場を少し散歩するとのことで、残念ながら別行動となった。ガンデン寺は初めてだったが、山の頂上にデンと無数の廃墟の塊が密集しているのだ。近づいてみるとほとんど破壊された寺院のなかにポツポツと再建された建物が目立つ。そのなかの幾つかの寺院に入ったが、壁画やタンカはここもやはりほとんど新しいものであった。しかし、このガンデン寺近くの山頂からの眺望は素晴らしかった。眼下の谷間は広々としており、緑と黄の畑、緑の樹林と集落が一望できる。谷間の集落から登ってきたと思われるチベット人の子供たちと、運転手→ガイドの通訳で少し話をした。女の子2人は特に可愛かった。

明日(8日)はラサを出発ということで、午後は車でポタラ宮近くまで行き、ガイドの王さんと2人で薬王山(小さな丘)に登った。王さんはガイドを始めてまだ2年目ということで、薬王山は初めてであった。薬王山の麓にあるタクラ・ルブク寺を見学した後、その側から登るのだが、7年前に私が発見したルートである。薬王山の最初のピークにはポールが立ち、無数のタルチョ(経文が印刷されている色とりどりの旗)が翻っている。ここからのポタラ宮の眺めは最高である。おそらく写真集や絵ハガキの写真はここから撮ったものと思われる。さらに行くと山頂にはTV塔が建っており、そこから別ルートで下山した。その夜はラサ最後の夜ということで、河合氏とガイドと3人で夕食を中華レストランでとった。

8日、いよいよラサから西へランクル車での旅が始まった。河合氏は高山病が回復し

ないのでラサに残ることになり(6日に決断し、現地旅行社にラサからカトマンズへの航空機の手配を依頼済み)、1人旅(ガイドと運転手は一緒だが)となってしまった。順調に事が進めば、私より河合氏の方が1日ぐらい早くカトマンズに到着するはずなので、カトマンズでの再会を約して出発した。しかし、後日カトマンズで再会して河合氏から事情を聞いてわかったことだが、河合氏は必死の努力により、やっとカトマンズに、しかもカトマンズを離れる1日前に到着したのであった。その間、オーバーステイのためのホテル代、カトマンズまでの航空運賃等自腹を切らざるを得ず、経済的にもギリギリであったとのこと。何よりも旅行会社や飛行場の係員の応接に腹がたったとのことである。この件での教訓は、要は中国側(漢人)の対応がいかげんで、危機管理は結局自分の判断で行わなければ、たとえ旅行会社の手配を得ていても個人旅行は危うくなる、ということであった。

ともかく、河合氏の身を案じつつも、後のことは旅行会社に任せて私は予定どおりチベット縦断の旅を始めた。ネパールとの国境の町ダムまでは、ただ行くだけなら車で2泊3日の旅であるが、今回の旅はチョモランマ・ベースキャンプへのトレッキングを省略したとはいえ、歴史的町で仏教寺院を見て廻る予定なので3泊4日行程である。さらに国境を越えてカトマンズまではあと1日かかる。

車はヤルツァンボ河を渡り、クンガ空港とは逆に西に曲がり日尼友好公路をヤムドク湖に向かう。しばらく行くと道はやや急坂な山道に入る。途中荷物を満載したトラックやガソリントラック車が喘ぐように登っているのを追い越し、やがてカンパ・ラ峠(4,794m)に着く。風が強くタルチョが翻っている。眼下には薄みどりに覆われた山々に囲まれて明るい青色のヤムドク湖(4,480m)が静かに横たわっている。遠方には雲の上に雪山が少し顔を出している。前回雪山は雲に覆われて遠望できなかっただけに、感激も新たであった。

カンパ・ラ峠をしばらく行き、ナンカルツェの村を過ぎると再び山道に入る。山々が複雑に聳えている谷間を登って行くとやがてカロ・ラ峠(5,045m)。この峠の少し手前に絶景ともいえる箇所がある。カロ・ラ山(7,223m)から大雪壁が見上げるほどの高度差、約2,000mを氷河となってダイレクトに一気に目前まで落ち込んでいるのだ。恐怖心を覚えるほどだ。反対側奥に雪山が見える。カロ・ラ峠を越えると谷間は広くなり両側の畑の緑が気持ちを和ませてくれる。農家や村が点在し生活圏である。道も比較的良い。

やがてチベット第三の町ギャンツェに到着。この町はイギリスとの戦争で舞台となった小高い丘に建つギャンツェ城と、イギリス軍を防ぐために構築された高い防御堀に囲まれた白居寺で有名である。白居寺は仏教美術の宝庫といわれ、特に立体マンダラや壁画としての大マンダラ、大仏塔内部に描かれた仏像壁画や仏像に期待していた。しかし、残念なことにショトツェ(雪頓)祭の準備のためほとんどのラマ(僧)がラサに行っており、各寺院の内部を見ることが出来なかった。ただ、留守役の坊さんに交渉してやっと大仏

塔のパルコル・チョルテンの一層のみ見せてもらった。八層建てで75部屋あるといわれているが、一層で約10部屋位か。写真でしか見れなかった各種尊像の壁画は15世紀のものとしては比較的保存がよかった。素晴らしかったので片っ端から写真を撮る。

シガツェ近くのシャル寺に寄ってから本日の宿泊地でもあるチベット第二の町シガツェに到着。この町は東のダライ・ラマのポタラ宮に対する西のパンチェン・ラマのタシルンポ寺で有名だ。さて、舗装された道の市内を歩いてシガツェ(日喀則)飯店着。ところが、満員のため断られ向い側の江河大酒店に変更されてしまった。案内された部屋は2室続きのスイート・ルームらしき素晴らしい部屋？　だが、お湯はもちろん水も出ず、シャワー室はなんと電灯も切れている。交渉してすったもんだの末、別の部屋にチェンジ。ところがこの部屋もお湯が出ず、ガイドと運転手が宿泊する隣の部屋のシャワーを借りる始末。明日はなんとしてもシガツェ飯店に泊まれるようガイドに念を押す次第であった。(トイレは詰まって水が流れず「大」は使用不可。明朝シガツェ飯店で用を足す。)

翌8月9日、今日は念願のタシルンポ寺見学。ホテルから約2kmを車で行く。裏山を背にして広がる寺院はさすがに偉容を誇る。各代のパンチェン・ラマの霊塔殿や、金銅仏としては世界最大ともいわれる26.2mもある弥勒仏、天井に描かれた巨大なマンダラ等々約2時間にわたって見て廻った。充実した時間であった。もっと時間があれば隅々まで見て廻りたかった。一旦ホテルへ戻り、荷物をまとめてシガツェ飯店へチェンジ。午後は市場へ行きガイドと2人で散策した。この市場は貴石類、銀細工の装飾品などの土産物売る市場と、町の人々の利用する日用品を売る自由市場とに別かれている。土産物市場では何度も行ったり来たりしたため、ある店の若い2人姉妹と顔なじみになり、ガイドの王さんのつたないチベット語の通訳でもなんとか話をすることが出来た。とても明るい女性でゲラゲラ笑ってばかりいた。こういう時を過ごすのはとても楽しい。

ホテルへ戻ってバーで休憩。今日は私の誕生日ということで王さんがビールで祝ってくれた。シガツェ飯店はさすがにバーも売店もあり立派。ただし、ホテルにつきもので値段は高い。絵ハガキとシガツェのロゴ入りのTシャツを買うにとどめた。たまたまカトマンズから入国した日本人女性3人と売店で出会ったので、タンカ、美術書などはラサの新華書店で買うようアドバイスをした。この日、ガイドと運転手はホテルを追出され、夕方やっと近くの招待所に落ち着いたとのこと。ラサの旅行会社の手配とはいえ、ガイドにもラサから離れるにつれて情報は不正確、状況も現地に着いてみないと分からないとのこと。ホテルのチェンジは結局客1人分がやっとで、旅行会社の被雇用人であるガイドと運転手は経費節約のためか、シガツェ飯店には泊まれなかったらしい。チベット奥地では宿泊状況は不十分とは知らされていたが、要求は要求として行わないとズルズルあたりまえになってしまうので要求して来たのだが、2人には申し訳ない結果となってしまった。

8月10日、今日の行程はツォー・ラ峠(4,500m)を越え、ラツェ付近の温泉を経てさらにジャツォー・ラ峠(5,220m)を越えてシェーカルというあまり大きくない村までである。この行程の特徴は山あいの広い所を延々と道が続き、両側には菜の花の黄色がまるで川のように延々と続き、両側の山々は茶白っぽいかわずかに薄い緑がかっているかが延々と続く風景であった。温泉浴地という所は建物の中に2か所乳白色の温泉がある。一つは汚かったがもう一つは実際にチベット人が入浴中であった。残念ながら我々は遠慮した。ジャツォー・ラ峠はなだらかな丘陵でタルチョがヒモで繋がれ地を這うように横たわっている。周囲は遠方に6,000m級の雪山が高曇りの雲の下に見える。峠からの下りはまるで北海道の高原を走っている感じである。着いたホテルは日尼友好公路から離れた所にあり、シェーカルはさらに離れた所にある。ホテルに荷物を置き、村の山腹にあるシェーカル寺へ行く。ホテルに戻って6時まで所在なし。6時からやっと水が出るのだ(勿論お湯は出ない)。

8月11日、今日はこの旅行でのハイライトを迎える。天気が良ければチョモランマを展望し、シシャパンマを身近に展望し、さらにヒマラヤの高峰を雄大に展望出来るはずである。朝早く出発。天気は曇りだがだんだん晴れてくる。道は良く運転手は飛ばしに飛ばす。70~80キロ、まれに90キロ近く飛ばす。砂ぼこりが凄い。やがティンリ(定日)という村に着く。大草原ともいべき平原にある村であるが少し手前で車を降りる。左手の奥に大きな塊となった雪山の連山が上部を雲に覆われて下部半分が見える。後で地図で確認をしたところ、中央にはギャチュンカン(7,922m)、チョー・オユー(8,153m)が寄り添っており、その少し左側に一部見えるのがチョモランマで(8,848m)である。チベット人の運転手は何回もチベット縦断の旅のお供をしたので、ほとんど雲に覆われていてもどれがチョモランマかは分かるとのこと。ティンリからしばらく行くと真っすぐな道が登り坂になり、後ろを振り返るとなんと真後ろにチョモランマが上半分を雲の上に出して屹立しているのだ。望遠レンズで覗くとかなりの迫力で眼前に迫る。3年前の91年にネパール側から眺めた時以来の、しかもチベットからの再会である。ネパール側と違い、手前に高山がなく、かつ独立峰のように見えるため、これは最高級の眺望だ。写真を撮ったりして満喫したあと、山道をさらに登って行く途中もしばらくの間見えていたが、結局、チョモランマの全貌を眺めることが出来たのはこれが最初で最後であった。

最後にラルン・レ峠(5,050m)を越えていよいよ国境へ向かって下り始めると、急に前方180度の展望が開かれた。まさに絶景、絶景である。眼下は平原状台地が広がり、その奥にはヒマラヤ山脈の高峰が雪山となってニョキニョキと聳え立っているのだ。右手にはシシャパンマ(8,016m)を中心に数峰、正面から左側にはチョー・オユーを中心にいくつかの高峰が。ただし、チョモランマはチョー・オユーなどの後ろに隠れて見えない。シシャパンマは大きな山容で直ぐにも麓に行けるほどに近い。この場所はテントでも張って1日中眺めていてもあきない所だ。

平原状台地を真っすぐに突っ切って谷沿いに国境まで高度差3,000m近い急降下となる地点に出ると遮るチベット側の山がなくなったので、ネパール・ヒマラヤの高峰が全貌を見せ出した。これまた圧巻である。しばしば車を止め眺め入ったり写真を撮ったりした。谷間を下り出すと高峰はだんだん見えなくなるが、今度は道の両側の景色の変化に驚嘆させられる。初めは草、次に低い灌木が現れ、草花もピンク、黄色、白色と彩り鮮やかに現れる。今までの茶白色の裸山中心の寂寥とした世界からやっとな緑の息づく世界に戻れたことは、本当に心が和む。ニェラム(3,700m)という村付近からはだんだん谷間は深く切れ込んで溪谷の様子を呈してくる。ぐんぐん高度を下げるにつれて、溪流の両側は断崖となり幾筋もの滝が白糸となって落ちている。まるで日本の黒部溪谷を下るような感じである。さらに下ると樹林は広葉樹となり、やがて国境の町ダム(カサ、樟木)(2,300m)に到着。この町は急斜面にへばりつくように曲がりくねった道の両側に開けている。はるか下方にはイロハ坂のように道が続いて国境の友誼橋が見える。久し振りの雨模様のなか町を散歩する。交易品を満載したトラックや荷車が所狭しと行き交い、ネパール人、チベット人が入り混じって賑わっている。

今日でチベットの旅は終りなので夕食は3人でビールで乾杯。そのあとガイドと運転手にチップをあげた。日本の旅行会社のアドバイスもあって金額は迷った。良くしてくれた感謝の気持ちと、あまり高額では後々の中国旅行での日本人の在り方の問題や、高額チップがあたりまえになってもいけない、というジレンマに陥りながら、ある程度の額を思い切ってあげることにした。それでも彼らの所得・生活水準からすればかなりのものであったと思う。

明るる日、ホテルの隣にあるイミグレーションで出国手続きを済ませ、国境の友誼橋までは道がぐちゃぐちゃにぬかるんでいるので、運転手に車で送ってもらった。ただし、旅行の契約は終わっているのだから、別料金100元必要とのことで了承した。これは高い。友誼橋でガイドと運転手に別れを告げて橋を渡りだすと、ネパール側から来た西遊旅行カトマンズ支店のガイドの出迎えを受ける。ネパール側の町コダリで入国手続きを済ますと車をチャーターし崖崩れの所まで行き、そこから専用車に乗り換える。谷間を抜けるまでは2か所の崖崩れがあり、計2時間以上修理が済むまでのんびり待ったりして、予想どおり時間がかかる。この時期は雨がよく降るので崖崩れはしょっちゅうで、車と徒歩を繰り返すことが多いのだ。チェックポイント3か所通過し、タトパニの少し先のバラビスで昼食。懐かしきカレーであった。

カトマンズまでの行程も結構変化があっただけで、あきない。何度か川を渡り、舗装くずれのデコボコ道を通り、赤土の山を見、峠を越え、有料道路を通り、バネパ村を越えると人家も増え並木道になる。バクタプールに入ると市街地なので車が増え混雑し、排気ガスがひどい。カトマンズ市内だけでなく郊外の町でも排気ガスに汚染されているのだ。ホテルはシェルパホテルの近くのマウンテンホテル。

ガイドのタマンさんの話では河合氏は昨日の時点ではまだカトマンズに書いていないとのことだったので、ホテル到着と同時に彼に頼んで支店に問い合わせてもらった結果、河合氏は明日(8月13日)昼ごろカトマンズに到着予定とのこと。予備日があと1日あるとはいえ、もし、今日も明日も着かなかったらどうしようかと車中で思っていたのでとにかくほっとする。一安心なのでホテルで2日ぶりにシャワーを浴び4日ぶりで洗髪をした。そして夕食はホテル近くのチベット料理レストランで思いっきりビールを飲んだ。明日は河合氏を市内の歩いて廻れる観光場所やお土産店を案内するため、知っている場所を下見などして過ごした。

完

「探検・探査の会」発足以後の経過（簡略年表）

1990（平成2年）11／10	探検部現役による天山事故報告会及びOB会結成についての よびかけ（市大）
91（H3年）12／28	「OB会設立準備のお知らせ」を全探検部OBに発送
92（H4年）2／15 7／1 7～8	第1回総会（市大） 「OB会設立のお知らせ」を全探検部OBに発送 天山トムール峰登山（探探会後援）
93（H5年）1／30	第2回総会（伊勢山会館） 会報1号発行
94（H6年）1／29 6～8 12／3	第3回総会（伊勢山会館） 会報2号発行 天山トムール峰登山（探探会後援） 天山トムール峰登山報告会（市大） 70年代前半のOBの集い（金沢八景）
95（H7年）2／11 9／23 ～24	第4回総会（中華街） 会報3号発行 丹沢交流登山 （OB、現役）
96（H8年）4／20 7／1	第5回総会（伊勢山会館） 会報4号発行



編集後記

毎年、総会の時期に合わせて発行を準備してきましたがいろいろと事情があって今回は発行が遅れてしまいました。ご容赦下さい。

今回の第4号から印刷を業者に依頼することになりました。市大を借りて遅くまで苦勞して印刷製本したときのことが思い出されます。

次号には、多数の寄稿を期待したい。今年も、会員の皆さんの健康と活躍をお祈りします。(河合)

今回から業者に依頼する訳だが、昨今のデジタル技術により写真入りのページも週刊誌並にプリントされるようになった。また、製本についても中折中綴じが一貫処理される為、納期は通常の十分の一といった具合である。かと言ってコストについては、会費でまかなえる金額であるのでご心配なく。

次回からもこの方式で発行をすすめるので、是非会員の方々から写真など入ったビジュアルな記事の寄稿を期待しています。今年も、会員の皆さんの健康と活躍をお祈りします。(小森)

探検・探査 第4号

発行年月日 1996年6月20日

発行者 横浜市立大学
探検・探査の会

代 表 大野 正夫

編 集 探検・探査編集委員会